

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02541

研究課題名(和文) F・スコット・フィッツジェラルドの長編小説における近代化および世俗化の研究

研究課題名(英文) Modernization and Secularization in F. Scott Fitzgerald's Novels

研究代表者

杉野 健太郎 (Sugino, Kentaro)

信州大学・学術研究院人文科学系・教授

研究者番号：40216320

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：デビュー作『楽園のこちら側』の「すべての神は死に、すべての戦争は戦われ、そして人間への信頼はすべて揺らいでいる(中略)心に神はいなかった」という「失われた世代のマニフェスト」は「罪の赦し」(1924)というカトリック教会からの離脱物語まで続く。しかし、翌年の代表作『グレート・ギャツビー』(1925)で私がモダンな信仰と呼ぶような近代的信仰が成立する。モダンな信仰とは、近代的の啓蒙思想の流れにあり、アメリカのポジティブな思想などとも通底する世界と自己に関する楽観的信仰であり、現在もよりどころとされる人権思想とも深く関わっている。しかし、その信仰も次作『夜はやさし』(1934)では失われてしまう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

F・スコット・フィッツジェラルドと言えば、ジャズ・エイジの寵児などと呼ばれ1920年代から続く大衆消費社会を代表する作家と一般には思われているであろう。しかし、彼はカトリックの家庭で育ち、作品にはカトリシズムの棄教ならびにキリスト教の近代化ならびに世俗化が刻印されている。「失われた世代」の代表作である最初の長編小説『楽園のこちら側』(1920)から始めたフィッツジェラルドは、代表作『グレート・ギャツビー』ではモダンな信仰とも呼ぶべきものが確立されるが、やがてそれも失われ完全に世俗化し喪失されてしまう。

研究成果の概要(英文)： In 1920, at the end of his first novel *This Side of Paradise*, F. Scott Fitzgerald wrote, "all Gods dead, all wars fought, all faiths in man shaken (...). There was no God in his heart." This *Lost Generation* manifesto lingers until his 1924 short story "Absolution," a story about departure from Catholicism. However, in *The Great Gatsby*, written the following year, I found that the writer established what I call "modern belief", an optimistic dedication to self, life and the world, which might have derived from modern enlightened thought and sentiment. This "modern belief", however, disappears under the powers and influences of mass consumption and affluent milieu, in his next novel, *Tender is the Night* (1934).

研究分野：アメリカ文学

キーワード：フィッツジェラルド 近代化 カトリシズム 世俗化 アメリカン・ドリーム 人権 近代オリンピック

1. 研究開始当初の背景

F・スコット・フィッツジェラルド(1896-1940)は、自らが名付けた「ジャズ・エイジ」の作家、あるいは、ヘミングウェイに最初は使われた「ロスト・ジェネレーション」の作家として知られる。この二つの呼称は、フィッツジェラルド作品を読み解くための今まで見過ごされがちであったキーを示している。「ロスト・ジェネレーション」は宗教および啓蒙主義を中心とするイデオロギーとその弱体化を、「ジャズ・エイジ」は(ジャズという音楽やそれが指し示すエスニシティ以上に)現代社会の端緒となった大衆消費社会を指し示している。

知名度のわりには、日本において、フィッツジェラルドは、研究とりわけ研究書がかなり少ない作家である。またその研究は、代表作『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925)に偏向している。この『グレート・ギャツビー』は、フィッツジェラルドが亡くなった1940年には忘れ去られた小説であったが、その後再評価されアメリカ文学を代表するキャンオンとなった。その再評価に最も大きな役割を果たした批評は、主にライオネル・トリリングの1950年刊行の『リベラルな想像力』(*Liberal Imagination*)がもたらしたアメリカン・ドリーム解釈である。「アメリカン・ドリーム」という言葉は、1925年刊行の『グレート・ギャツビー』の6年後の1931年に市井の歴史家ジェームズ・トラスロウ・アダムズ(1878-1949)が刊行した『アメリカの歴史』(*The Epic of America*)においてアメリカ独立宣言の人権(自然権)の部分と同様な意味で初めて使われた言葉である。すなわち、啓蒙主義的およびプロGRESSIVEな伝統に連なるイデオロギーである。その啓蒙主義的イデオロギーである「アメリカン・ドリーム」を、その言葉が初めて使われた1931年より前の1925年の『グレート・ギャツビー』に適用したのが、アメリカン・ドリーム解釈である。その解釈によれば、主人公ギャツビーは、その出自(社会階層、人種・民族)のハンディを乗り越え社会的上昇という結果を収めたので、アメリカというネーションにとって意義深い「アメリカン・ドリーム」の象徴であり体現である。この解釈は今も主流である。

しかし、応募者は、20世紀アメリカ文学のなかで最高傑作という評価までであるこの作品『グレート・ギャツビー』にはさらに意義があるのではと模索した。たどりついたのは、宗教とその世俗化というテーマである。F・スコット・フィッツジェラルドの作品は、その代表作の『グレート・ギャツビー』のアメリカン・ドリーム(アメリカニズム)、ナショナリズム的解釈に引きずられて、他のイデオロギー的側面が軽視されている。フィッツジェラルドの宗教・世俗化に関して最新かつ最重要な世界的研究は、Tracy Fessendenの文化史的研究 *Culture and Redemption* (2007)ならびに Paul Giles のカトリック的研究 *American Catholic Arts and Fictions* (1992)である。簡潔に述べれば、文化史家 Fessenden は、作者フィッツジェラルド自身を「カトリック・セキユラー」、すなわち、カトリック教会から離れたもののカトリック的マインドセットと完全に縁が切れない者と結論付けた。また、Gilesの研究は、カトリック的要素をフィッツジェラルドの作品のなかに見出している。しかし、ともに世界的な学者の研究だが、両書は、以下の3点によって乗り越えられるべきと考える。第1点は、個々の作品を精緻に読解すること。特に Fessenden の研究は文化史的研究なのでやむをえない面があるが、作品の読解が精緻さをいささか欠いている。第2点は、すべての長編を論じること。両者ともにフィッツジェラルドに本の1章が割かれているのみな

でやむをえない面もあるが、『グレート・ギャツビー』を中心として短編小説を含めて4作品程度を論じているのみであり、近代化・世俗化の推移が明らかにできていない。第3にカトリシズムの枠内に拘泥しないこと。フィッツジェラルドがアイリッシュ系カトリックの出なのでやむをえない面があるが、カトリックを逸脱し「ポストモダンな宗教 (Hangerford) やスピリチュアリズムやポストモダニズムへと逸脱する点も見逃してはいけないだろう。応募者は、先行研究を受け継ぎながらもまず『グレート・ギャツビー』の読解を刷新しようと試みた。その試みは、『グレート・ギャツビー』に、ニーチェならびに(フィッツジェラルドが最も大きな影響を受けた)メンケン(とりわけ、*The Philosophy of Friedrich Nietzsche, 1908*)の影響を読み取り、『グレート・ギャツビー』では少なくとも当時のカトリシズムとは異なるモダンで(再)魔術化的な信仰あるいはギャツビズムとでも呼ぶべき宗教的マインドセットが確立されると結論付け、昨年国内外の学会で発表し、現在は国際ジャーナルに英語論文を投稿中である。

さて、フィッツジェラルドの作品全体を通奏低音のように貫くのは、「アメリカン・ドリーム」というイデオロギーではなく、それを包含する近代化、とりわけ宗教を中心とするイデオロギーとその世俗化と弱体化さらには喪失である。特に、フィッツジェラルドの長編デビュー作『楽園のこちら側』(*This Side of Paradise, 1920*)から『グレート・ギャツビー』に至る作品において、アメリカン・ドリーム以上に、宗教および世俗化は重要なイデオロギー要素である。「アメリカン・ドリーム」は、ほぼ『グレート・ギャツビー』にのみ顕現したイデオロギーの一つに過ぎない。『グレート・ギャツビー』の次の『夜はやさし』では、主人公が、理念や理想を失い、男性性を失い、自然主義的に富やアルコールに支配され、イデオロギーあるいは超越概念が力を失い、ポストモダニズムが支配し、**Richard Godden** や高野泰志が解明したように、自然主義的環境や遺伝に代わって大衆消費社会の欲望のネットワークに主人公が絡み取られる様が描かれている。最後の未完の作品『ラスト・タイクーン』では宗教なしでギャツビーは可能かを問うた作品と言える。応募者は、全作品は不可能にしても、全5長編を貫く近代化(世俗化と大衆消費社会が中心となる)を論じる意義と必要性を見出し応募する次第である。これが着想の経緯である。

2. 研究の目的

F・スコット・フィッツジェラルド研究は、『グレート・ギャツビー』および『夜はやさし』に偏向した評価がなされ、特に前者の階層、人種・民族というアイデンティティ・ポリティクスと絡み合ったナショナリズム=アメリカニズム(アメリカン・ドリーム)的な側面が強調されがちである。しかし、フィッツジェラルドは、近代化、とりわけ宗教を中心とするイデオロギーとその世俗化・弱体化という問題に関して重要な位置にある。全作品を通奏低音のように貫くこの観点からの研究が、フィッツジェラルドのより明確な全体像を得るには必須である。近代化の他の諸相(資本主義・大衆消費社会、階級・ジェンダー・セクシュアリティ、都市化)との関係をも考察することによって、日本では研究が十分に行われてこなかった作家フィッツジェラルドの長編小説の研究を飛躍的に進捗させることが研究目的である。

3. 研究の方法

本研究の目的は、F・スコット・フィッツジェラルドの長編小説全5編の近代化、とりわけ宗教を中心とするイデオロギーの弱体化と大衆消費社会というテーマを研究することである。日本

においてフィッツジェラルドの知名度は高いが、本格的な研究書がない理由の一つには、文章が長く難しい語彙を用い抽象的な内容が多いテキストの英語の難しさがあげられるだろう。本研究は、関連する短編小説とエッセイや手紙、近代化・世俗化・大衆消費社会文献などとともに、全5長編のうち、すでに研究を進めた中心的1長編を除く4長編を1年に1長編ずつ計4年をかけて分析していく。その分析の際には、**Mizener**、**Miller**、**Brucoli**、**Berman** といった定番の研究書から最新の研究書さらには *F. Scott Fitzgerald Review* などの国際ジャーナルに掲載された最新の論文、および同時代の関連図書やイデオロギー関係なども分析に用いる。

4. 研究成果

F・スコット・フィッツジェラルドと言え、ジャズ・エイジの寵児などと呼ばれ1920年代から続く大衆消費社会を代表する作家と一般には思われているであろう。しかし、彼はカトリックの家庭で育ち、作品にはカトリシズムの棄教ならびにキリスト教の近代化ならびに世俗化が刻印されている。

最初の長編小説『楽園のこちら側』(1920)のエンディングでは、「すべての神は死に、すべての戦争は戦われ、そして人間への信頼はすべて揺らいでいる(中略)心に神はいなかった」という主人公エイモリーの心情が描かれる。この「失われた世代」のマニフェスト的な心情は、次の小説、『美しく呪われた人たち』(1922)でも続く。

重要な位置にあるのは、『グレート・ギャツビー』(1925)から省かれた「罪の赦し」(1924)であろう。この小説は、消費文化を背景にカトリック教会からの離脱を描く。カトリック教会から離脱するのは、主人公の少年だけではなく神父でもある。

しかし、このいわばカトリック信仰からの離脱物語の翌年の代表作『グレート・ギャツビー』(1925)では、不思議なことに主人公ギャツビーは何らかの信仰を持っていることを解明した。この信仰を私は、モダンな信仰と呼ぶ。モダンな信仰とは、言わば、近代的の啓蒙思想の流れにあり、アメリカのポジティブな思想などとも通底する世界と自己に関する楽観的信仰であり、現在もよりどころとされる人権思想とも深く関わっている。しかし、その信仰も次作『夜はやさし』(1934)では失われてしまう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉野健太郎	4. 巻 4
2. 論文標題 “ Absolution ” とThe Great Gatsby	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 フィッツジェラルド研究	6. 最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sugino, Kentaro.	4. 巻 3
2. 論文標題 Pious Fitzgerald: The Great Gatsby and Modern Belief.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Scott Fitzgerald Review of Japan	6. 最初と最後の頁 7-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉野健太郎	4. 巻 2
2. 論文標題 プロシーディングス「ワークショップ：『グレート・ギャツビー』の映画化を巡るワークショップ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『フィッツジェラルド研究』	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉野健太郎	4. 巻 20
2. 論文標題 F・スコット・フィッツジェラルドと宗教	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中部アメリカ文学	6. 最初と最後の頁 26-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sugino, Kentaro	4. 巻 25
2. 論文標題 F. Scott Fitzgerald in Japan.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The F. Scott Fitzgerald Society Newsletter	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉野健太郎	4. 巻 1
2. 論文標題 国際F.スコット・フィッツジェラルド大会参加報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フィッツジェラルド研究	6. 最初と最後の頁 45-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 杉野健太郎
2. 発表標題 「 “ Absolution ” とThe Great Gatsby」
3. 学会等名 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉野健太郎 高野泰志、渡邊俊、和氣一成と共同
2. 発表標題 シンポジウム「フィッツジェラルドと映画」
3. 学会等名 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会2019年度全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉野健太郎司会進行
2. 発表標題 『グレート・ギャツビー』の映画化を巡るワークショップ
3. 学会等名 日本F.スコット・フィッツジェラルド協会全国大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 杉野健太郎編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 398
3. 書名 アメリカ文学と映画	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関